

ロシアの性愛論 V. : ローザノフ 2.

青山, 太郎
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5479>

出版情報 : 言語文化論究. 10, pp.133-145, 1999-03-01. 九州大学言語文化部
バージョン :
権利関係 :

ロシアの性愛論 V.

ローザノフ 2.

青山太郎

1

「人類を純潔化する оцеломудрить こと——これを人々は二千年来、性を斥け、性を滅却することと解してきた。そしてこれが性を汚すこと、性を墮落させることであるとは、思ってもみなかった」。(『曖昧模糊の世界で』1901所収『結婚とキリスト教』p.102)

性は原初の姿において、それ自体として an und für sich 汚れたものなのか、それとも単に汚されたものにすぎないのか。もしも汚されたにすぎないのならば、これを元の姿に戻さねばならない——これがローザノフの探究の根本理念です。この探究のうえで、彼はのっぴきならずキリスト教の性愛観と衝突することになります。

評論『宗教としての家族』(1898『曖昧模糊の世界で』所収)を書いた頃、ローザノフは、キリスト教と性は両立可能だと考えていました。キリスト教の根本特徴は、一部の人々の考えるような無性でも無肉でもない。これは肉化された神性(藉身)の宗教、「地上の母胎の内なる神性」の宗教であって、キリストは母胎を通して地上へ降ることで、性・結婚・家族を聖化したのでした。「娶らざるに如かず」は新約の根本理念ではない。福音書のこの些々たる文句を修道精神の大樹へと生い茂らせることで、キリスト教は道を誤った。そう考えぬかぎりキリスト教を救うことは出来ない。そう考えぬかぎり、旧約と新約の乖離は不可避だからです。創世記冒頭の「生よ繁殖よ地に満盈よ」という神の誠命うめふえが示すとおり、旧約は徹底して多産を理想としている。つまり、性と結婚と家族の肯定の上に立っている。新約の「娶らざるに如かず」(マタイ伝19.1)は、これを根本から覆す思想です。

ローザノフは性をキリスト教の核心に読み込むことで、キリスト教の理念を「ゴルゴタの宗教」から「ベツレヘムの宗教」へ転換させようとする。ベツレヘムの宗教こそ本来のキリスト教であり、彼はこれを掘り起こし再興することで、キリスト教を本来の姿に戻すのだと言う。つまり彼が批判するものは、あくまで歴史の内に形成されてきた教会キリスト教であって、キリスト教そのものではないという立場です。キリスト教の基盤に立って、誤ったキリスト教を批判するという立場です。

2

ところが、その後の著書、1906年の『ロシアの教会』、1911年の『暗き相貌』、『月光の人々』等において、ローザノフのペンは段々と無遠慮になってきます。これまで誤ったキリスト教と思っていたものが、実は本来のキリスト教ではないのかと出てくるのです。以前は、キリスト教は肉を敵視することで道を踏み外したのだと思っていた。ところが今や、肉を

敵視することこそがキリスト教の本質なのではないかと思えてくる。それまで例外と見えていたものが、実は通則だったのではないかと。

例えば、はじめローザノフは、キリスト教を無性・無肉とする考え方は西方教会のものだとしていました。聖母マリヤによる処女懐胎のドグマをつくり出したのはカトリズムでした（『ヘロデ王伝説』）。しかるに『ロシアの教会』（1906）では、このドグマは端的に正教会のものとしてされています。

また、『ヘロデ王伝説』でローザノフは、精神と肉体の分裂という頽廢の由って来る所以を分析し、これは人々が福音書を誤解したのだとしました。人々はキリストの言うところを正しく理解しなかった。この迷誤のことで福音書に、キリストに責任はない。ところが『暗き相貌』では、キリスト教そのものが死の神化にほかならず、その礎石を置いたのはキリスト自身である（人々が彼を誤解したのではない）と言います。

ロシアのセクトたる去勢派についても、同じ考え方の変化が見られます。当初去勢派はキリスト教からの逸脱、ただし首尾一貫せる逸脱でしたが、『暗き相貌』では、去勢派こそ首尾一貫せるキリスト教であるとされています。

キリスト教の禁欲主義への傾斜は、「娶らざるに如かず」とか「其の娘を嫁がする者の行為おこは善し。されど之を嫁がせぬ者の行為は更に善し」（コリント前書7.38）といった、些細な句にのみ発しているのではない。福音書全体とキリストの人格そのものに浸透している無性の精神こそ、性と相容れないものであることを、ローザノフは次第に否定しえなくなってくるのです。

これは既に、キリスト教の内に身を置いたキリスト教批判とは言えません。キリスト教の外に立った、キリスト教への有罪判決ではないでしょうか。同じ批判でも、両者は次元を異にしている。ローザノフがキリスト教に浴びせる批判的言辞の内には、この両種の批判が絡み合って混在しています。キリスト教に対しこぶる辛辣な評言を記しつつ、時として彼はキリスト教からおそろしく遠い地点まで行きますが、それでも最後にはキリスト教の圏内へ立ち戻ってペンを置いている。そういう印象をわれわれは受けます。言い換えれば、彼は原則的にはキリスト教徒として発言するのですが、その語調は時としてはなほだ無遠慮になり、読む者は、こうした言辞を口にする人間が、果して自らをキリスト教徒と見做しうるものだろうか、不審に思わざるをえない。彼は生涯、敬虔な正教徒だったらしい。彼にはロシアの正教会に対する、極めてアンビヴァレントな感情があったようです。『ロシアの教会』にこういう一節があります。

「概してロシアでは、分離派やセクト信者たちは大声で喚き立て、怖れを知らず、希望に溢れている一方、公的教会の代表者たちはよろずに悲観的で、一步前方ないし脇へ踏み出すことを怖れる。このことは公的教会そのものに、すこぶる温和でへりくだった様子を賦与するから、人はその欠陥をすっかり承知していても、これを批判することを心苦しく感じ、これを赦し、殆ど正教全体を否定していながら、すべてと和解して、やはり正教徒として死にたいと思う。これはロシアの信仰の秘密のひとつである」。

もちろん、彼がキリスト教徒であったかなかったかといった問いは、われわれ非キリスト教徒の脳裡にのみ浮かびうる問いであって、ローザノフ自身にとって、自分がキリスト教徒かどうかなどは、このうえなくどうでもよいことであつたに違いありません。彼は自らの精神の赴くままに、キリスト教と共に生き、キリスト教を批判していたのです。

いずれにせよ、『暗き相貌』の頃、ローザノフは既に、旧約と新約は和解不可能であると見ています。キリスト教の本質は修道制度（「娶らざるに如かず」）にあり、修道精神は明確に旧約の精神（「生よ繁殖よ地に満盈よ」）に反している。「新約と旧約の乖離」は実際に起こったのであり、以後彼の関心はますます古代オリエントやエジプトの異教世界へ向かうこととなります。

ここでは彼のキリスト教批判の諸相を、結婚問題をめぐって辿ってみますが、その際結婚 брак の語は、能うかぎり広い意味に解されていること、つまりこれは男女の愛、性行為、妊娠、出産、それに続く子供の養育と家庭の維持まで、すべてをひっくるめた概念であること、またこの語は、検閲を考慮したローザノフにより、しばしば性愛ないし性行為を示す婉曲語法として用いられていることをご承知下さい。さなきだに、ローザノフは結婚なき性行為なるものを思い浮かべることができない。彼にとって性行為は、同時に結婚でもあるのです。

3

ローザノフは『ロシアの家族問題』（全二巻、1903）において、結婚問題を主として法的・社会的側面から考察しました。ここで彼の問題意識は、否応なく宗教問題に逢着します。離婚問題の主たる障害は教会であり、また、私生児の社会的救済という問題を考えてみても、婚外出産が教会の目には変わることなく罪であるという、宗教問題に帰着するからです。

1902-03年にかけてロシア論壇のトピックとなったものに、Д. С.メレシコフスキーの主宰した「ペテルブルグ宗教・哲学討論会」があります。当時「新たな宗教意識」の理念に熱中していたメレシコフスキーは、これにより知識人と聖職者に対話の場を提供しようとしたのでした。ローザノフもこの討論会には積極的に参加しており、彼がここでおこなった幾つかの報告は、いずれも『ロシアの家族問題』のテーマに沿ったものです。（これら報告は、のちに論文集『ロシアの教会』に収められます。）

ここでローザノフは、所謂「キリスト教的結婚」の無内容性、教会挙式の形式主義を批判しています。教会挙式の問題は、一見瑣末な法規上の事柄に過ぎぬかと思えますが、ローザノフにとっては、これが教会とキリスト教の性意識を闡明するための、重要な手掛かりとなるのです。

革命前の帝政ロシアでは、結婚の条件として教会での挙式が義務づけられていました。その結果教会は、挙式とそれに伴う法規（結婚の障害たる血縁親等・姻戚親等についての婚前調査、戸籍簿への登録等々）にばかりかまけ、男女の血肉の結びつきとしての結婚そのもの、そこに形成される家族のことは、等閑に付してしまっただけです。

六十年代ニヒリストたちの中で盛んに行われた所謂「偽装結婚」（『何をなすべきか』におけるヴェーラとロプホーフの例）は、すべてこの「キリスト教的結婚」に基いていたのです。しかも合法的に基いていた。彼らは式を挙げ、そのまま分かれてしまう。この場合、結婚はあったのか、なかったのか。教会によれば、結婚はまぎれもなくあった。信心深い人々は、ニヒリストたちが教会挙式を敬わず、これを通りすがりの無用な事柄として扱うことで、教会を辱めたと憤慨します。しかし、結婚がひとえに教会挙式に存すると法によ

って定められ、教会もそう教えている以上、ニヒリストたちとしても、教会挙式に対してこれ以外のどういう態度がとれたというのか。彼らは挙式を不可避の形式として扱い、しかるのちこれを無用のものとして放り出したのでした。そして問題は、六十年代のニヒリストたちのみにとどまらない。世間には教会挙式こそ遵守されているものの、結婚は偽装にすぎないという場合が無数に存在するが、教会はこのことを一顧だにしようとしなない。例えば、妻が夫のことを(あるいは夫が妻のことを)、教会で挙式しておきながら、三年後に自分を捨てたと言ってこぼす場合。そんな時教会は尋ねる、「教会で式は挙げたのだね？」——「挙げました」——「それならあなた方は結婚しているわけだ。夫が妻のもとを(あるいは妻が夫のもとを)去ったとしても、それは祈りか精進のためかもしれない。そうではないという証拠がない以上、妻は(あるいは夫は)それに甘んじるべきだ」。挙式至上主義、「結婚の内なるこの空虚と無内容」は、教会によって否定されぬばかりか、常に変わらず称揚されてきたことを、ローザノフは指摘するわけです。

ローザノフの論法は常に具体的です。彼はプラゴヴィードフ著『歴代宗務総監史』から、次のような事例を引いています。明らかに、これは当時無数に存在した事例のひとつにすぎない。(『ロシアの教会』所収『結婚をめぐるミハイル神父の報告について』)

市役所書記ポワロ＝シヴェイコフスキーと地主の娘エフロシニヤ・バウリナは、長年内縁関係にあり、二人の間には既に五人の子供があったが、1827年12月、宗務院は二人が同時に血縁関係にもあることを理由に、彼らの関係を解消させた。子供たちは父母を奪われ私生児と呼ばれることになり、父親の姓と遺産への権利を失い、彼らの母親はもとのバウリナ嬢となり、夫の家を出て実家の両親のもとへ戻るべく指示された。

この件に際しての教会の態度を、ローザノフは次の四点に要約します。

1. 夫婦生活は存在するが、教会はこれを結婚と見ていない。
2. 愛は存在するが、教会はこれに関心である。
3. 子供たちは存在するが、教会はこれを不身持の所産と見做している。
4. 貞節は存在するが、教会はこれを無用のものと宣告した。

つまり教会によれば、「結婚解消後、〈バウリナ嬢〉は明日にも勝手な人のところへ嫁入りすればよく、〈独身者〉ポワロ＝シヴェイコフスキーもまた手当たり次第の娘と結婚すればよい。その際二人の間に生まれた五人の子供のことなど、全く憶い起こすには及ばない。子供たちは台所へでも押し込んでおくか？あるいは氷の穴行きか？養育院送りはどうだ？」(同上)

教会は、幸福だが非合法的な結婚を解消させる。不幸だが合法的な結婚は、いかなる場合にも解消させない。夫婦の争いが血を見るに至った時ですら、教会は夫婦が分かれることを許さない。つまり、教会にとって大事なものは挙式であって、結婚ではない。「教会で司祭の手に接吻したのかね？——はい、しました。——それならもう問題はない。万事は終わりだ」。あるいは、「接吻しなかったって？とすると、未だ何ひとつ始まってはいない。結婚も家族もなく、婚配機密もなかった。あるのは不身持だけだ。そこから子供ができたのなら、これは不身持ゆえの子供であり、両親はこれを自分の子と呼ぶ権利をもたない。(同上)

4

教会は結婚と挙式を混同し、あまつさえ結婚を挙式によりすり替えている。ローザノフによれば、結婚の条件として教会での挙式を義務づけることは、全地公会による教義確定の全期間を通じて、本来教会の要求するところではなかった。これはビザンチン帝国の皇帝たち、レオ六世（九世紀）やアレクシス一世（十一世紀）の布告によるもので、ロシアの国家と教会はこれを踏襲したにすぎない。

神はアダムとエヴァを、彼らの肉体を、彼らの欲情を創った。神は人間を「其父母を離れて其妻に好合ひ二人一体となる」（創世記第二章）べきものとして創った。人は「男と女として」、「夫と妻として」、結婚へと創られたのであり、これこそ結婚の実体です。結婚の素材となるものは、男と女の組成、特性、生理、これらの反映たる心理等々であって、結婚はここから有機的に形成されるべきものです。ところがこのことは神の創造であるがゆえに、教会はこれには頓と無関心なのです。男女の間に愛があろうがなかろうが、年齢の差がいかほどであろうが、教会は万人を一視同仁に挙式させる。教会が創ったのは、「結婚に歩み入るための諸条件」と、結婚を覆う華麗な「儀式」です。そして教会は自らのこの作品に関するかぎり極度に妬み深く、いかなる個人にも国家にもこれへの干渉を許さない。

結婚と挙式の間を、ローザノフは聖像と聖像入れの関係に喩えます。聖像が神聖なのは、これを覆う聖像入れの存在ゆえではない。聖像入れを価値あるものとするのが聖像の存在です。ところがこの世にはしばしば、聖像と聖像入れの乖離という現象が起こる。聖像が聖像入れから抜き出されるということが起こる（市の書記ポワロシヴェイコフスキーの場合）。すると教会はこの抜き出されたものについて言う、「不身持である！ 誼うべきものである！」そこでまた聖像入れへ押し込んだ。すると「今や、聖なるものである」。

「これは一体全体どういうことだ？ もしも聖像と聖像入れがしっくり合ったものならば、つまりこれが〈よきものはよきものへ〉であり、神のよき創造に自らのよき人工的発明をつけ加えたのであれば、聖像と聖像入れは、共にあろうと別々にあろうと、どちらもよきものなのだ。（しかるに教会の言うところによると）両者が結びついていればよいが、結びついていない時はよくないのだ。教会は聖像（事実上の自然な結婚）を、それが聖像入れに入っていない時は必ず打ち壊そうとする。これは一体いかなる意味か。いかなる心理か。いかなる形而上学か。」「（『結婚をめぐるミハイル神父の報告について』）

挙式は本来、結婚の飾りにすぎない。その一例として、ローザノフはユダヤ人の結婚の場合を挙げます。ローザノフによれば、ユダヤ人というのは「結婚そのものをわれわれとは比較にならぬほど暖かく、優しく、堅固なかたちで有している国民」ですが、そのユダヤ人たちにも挙式はあります。ただし彼らの挙式は宗教上の機密ではなく、法的な義務でもなく、それゆえラビではない誰でもが執り行うことのできる儀式です。それは、神の創造という美しきものに投げかけられた、美しき覆いにすぎない。国家はこれに何の関心も示さないが、社会と個々人はこれに多大の愛をもって対する。かくも喜ばしい時、人は裾の長い古風な衣装で人前に出ることを好む。そのほうが一層美しく、喜ばしいから。しかしこれは芸術であって、機密でも法でもない。儀式は衣装です。本質はもちろん、それを着た人間の内にある。挙式とはあつたほうがよいもの、本質的にはなくともよいものです。

聖像と聖像入れ、つまり結婚と挙式の関係とは、本来こうしたものです。

ところがこんにち（二十世紀初頭）のロシアでは、聖像と聖像入れのこの関係が逆転している。聖像入れが絶対的な価値へと高まるために、聖像は悪しきものとされてしまった。結婚が詛わしいものとされた結果、結婚の本質、その祝福・力・喜び等々は、すべて挙式へと移行してしまった。挙式の有する絶大な意義とは、結婚そのものへの呪詛から流れ出たものです。神の創造たるあるがままの結婚への呪詛。もしも結婚が本当に祝福されたものなら、挙式なぞ興りもしなかったか、あるいは無意味なものに留まったことでしょうか。教会は口を開けば「婚姻は貴く、寝床は汚れなきもの」（ヘブル書13.4）であると確言します。しかしこれは正確ではない。教会は、結婚に関わる一切のもの、愛に始まり、夫婦の和合、子供の誕生、さらには子供そのものに至るまで、教会による聖化の外では、教会による聖化以前には、おぞましいものであると教えているのですから。教会の許可なくしては、同棲は不身持であり、子供は不身持の結果なのです。このことから、どれほど多くの嬰兒殺しが行われてきたことか。

そして教会は、神の創り給いし結婚は忌まわしいが、この忌まわしいものの有益なものへの作り替えは、挙式を通してなされると主張する。教会は挙式により黒いものを白く変えるのだと。つまり、挙式とは、罪深いものに着せられた聖なるものなのです。ここには神と偶像の対立がある。聖像入れが聖像の地位を占めてしまった。儀式の偶像が神の座を占めた。あたかもそこが罪深い場所であるかのように、聖なるものとして座を占めた。これこそ教会挙式発生史の歴史であり、形而上学であるとローザノフは言うのです。

教会挙式なしに夫婦生活に入ったこの上なく平穏な家族を、「結婚ではない」とする犯罪的な認定が、ここから生ずる。これらすべての自然発生的な家族がこの上なく法に合った結婚であること、彼らが(1)睦まじく、(2)純潔に、(3)子煩悩に生きている以上、そこにはまごうかたない「キリスト教的家族」があることを、教会は認めようとしません。夫と妻への祝福が樂園において、陥罪以前に与えられていることは、夫と妻の結合が罪深いものではないことを、明らかに示しているというのに。

5

ローザノフが引いているもうひとつの事例を紹介します。これはセルゲエンコ著『トルストイ伯の生活と仕事』にあるものだそうです。（『ロシアの教会』所収『教会の結婚観における若干の問題について』）

1896年6月、ヤースナヤ・ポリャーナの村で、妊娠を隠していたひとりの斜視の寡婦が、生まれた嬰兒を圧殺し池に捨てるといふ事件がありました。これまた当時のロシアで、無数に見られた事例のひとつです。

ローザノフは、彼女の結婚への願望ゆえに、断乎、斜視の寡婦を弁護します。世間は、教会は、子殺しゆえに彼女を咎めるでしょう。しかし悪いのは、婚外出産が罪であることを彼女に吹き込んだ世間（主として教会）であると、ローザノフは言うのです。

性的愛着（惚れること влюбление）とは、「どこか天の彼方に仕組まれ、そこから地に降ってきた大いなる事実、普遍的な事実」であり、エヴァの末裔であるすべての女は、この世界的感情を経験せずにはいない。同時にすべての女は、「汝（女）は夫をしたひ彼は汝

を治めん」という創世記の神の言葉にも従順です。こんにち教会はこの言葉を、「教会での挙式を経た法律上の夫」の意に解しているが、ここで神が言っているのは、明らかに、男と女の愛着という普遍的事態のことです。神の意志に外れはない。斜視の寡婦もまた、この神の意志の前には無力であった。出産をひかえ、羞恥心の金縛りに遇った彼女は、必ずや永いこと神の意志に抵抗したに違いない。しかし彼女はどうすればよかったのか。もはや若くはなく、誰も彼女の愛への欲求に対し、重い長期の責任を負おうとはしなかった。「それなら我慢するがいい」と教会なら言うでしょう。事実彼女は我慢した。しかし神の言葉「彼汝を治めん」は、教会よりも強く彼女を圧倒したのです。教会の要求は神の要求に抗し、結局神の要求が勝った。これがセルゲエンコの物語る事例の意味だ、とローザノフは言うのです。

こんにち婚外出産の恥は、人々の咽喉まで達している。つまり嬰兒の圧殺にまで達している。この恥はあまりに根強く、法律的ならぬ宗教的なものなので、いかなる君主も女帝も、自分の子供が教会挙式の外で生まれたことを公言しえないほどです。これ以上子供たちが殺されぬためには、この恥を低めねばならない。

創世記第十九章に、ロトと二人の娘の話があります。ロトの蟄居しているあたり一帯には人がいない。「我等には全地の習慣によりて子を孕むべき人あらず」。ヘブライ語の原文には「全地の法によりて」とあるそうです。この切羽つまった言葉に導かれて、姉妹は神が樂園で全人類に与えた誠命いましめを果たすわけですが、ローザノフによれば、ここには現代にとっての大いなる教訓が啓示されている。つまり、二人の娘は次々と、自分たちが誰の子を孕んだか大っぴらに言明している。確かに、懐胎の相手が誰であり、それがどのように始まったかを隠すことは、子殺しへの第一歩にほかならない。モーゼはロトの娘たちの例によって、「これは常に公表せねばならぬ」ことを示したのです。いっぽう教会は、問題がとっくに子殺しにまで行き着いていることをよく承知の上で、幾世紀にも亘りこう言い続けてきたのではなかったか、「お前たちは恥じ方が足りない！お前たちは恥知らずだ！もっと恥じろ！…」

6

ここに引いた二つの事例（ポワロ＝シヴェイコフスキーの件と斜視の寡婦の話）には、共通するものがあります。一方は、既にあるものの解消であり、他方は、妨げえないものを妨げんとする試みです。post factum と ante factum の違いはあるが、本質的には同じであって、ローザノフはこれを、子を産むことに対する戦いだと言うのです。教会にとって、子作りは何にもましてどうでもいいことなのだ、と。

創世記冒頭で、神は最初の人間アダムに「生よ繁殖よ地に満盈よ」という誠命を与えた。ローザノフにはこの誠命への完き信仰があります。というより、彼の内には「産み、殖える」ことへの揺るぎえぬ直観的信頼があり、これが旧約の句のうちに恰好の根拠を見いだしたのです。彼がこの直観に基づき、旧約の神話や新約の黙示録を援用しつつ展開する形而上学とは、ソロヴィヨフやベルジャーエフの「個の形而上学」とは対極的なもので、むしろショーペンハウエルショーペンハウエルの「種の形而上学」に近いものです。ただしショーペンハウエルの場合、人間の個はいかにしても種の力に抗しえないのだという、ペシミスティックな諦

念が根底にありましたが、ローザノフの場合、「人間の個は死すべきものだが、種としての人類は不死である」という理念は、彼にとって大いなる慰めであり、オプティミズムの源泉であるところが違います。

アダムとエヴァの最初の罪とは、二人が楽園で神の言いつけに背き、認識の樹の禁断の実（存在の論理的秩序）を食べたことでした。これにより人間は楽園を逐われ、死すべきものとなったわけですが、同時に神はエヴァに向い、「汝の苗裔、蛇の頭を砕かん」という普遍的な「全地の法」をも口にしたのでした。つまり、死は罪と共に人間にもたらされたが、人間のこの新たな性質は個体の不幸たるにとどまり、普遍的なアダムの不死、人類の不死は、子を産むことによって保障されているのです。「わたしの苦しみは残るが、われわれの苦しみは残らない。そして corpus universalis としての人類は、不死にして無垢である」。(『教会の結婚観における若干の問題について』)

そう考えれば、女の産みの苦しみの意味するところも明らかになります。出産の瞬間、蛇は婦とその胎内の新たな生命に勝利しようと努める。黙示録にあるように（第十二章）、「龍は子を産まんとする女の前に立ち、産むを待ちて其の子を食い盡さんと構へたり」。あるいは、「蛇はその口より水を川のごとく、女の背後に吐きて之を流さんとしたり」。しかし結局サタンは敗北を蒙ったのであり、婦の産みの苦しみとは、この苦しみへのサタンの復讐にほかなりません。

死は罪により人間にもたらされた。しかし人間のこの不可避の死は、出産の内に障害と挫折を見出すのであり、産婦は自らは息を引き取りつつも、嬰兒を両手に差し上げて、「死よ、汝の刺は何処にかある」（コリント前書15.55）と叫ぶことができる。産むことは原罪への永遠の勝利のしるしであり、地上で最も神聖な行為なのです。

はかならぬこのところで、つまり産むことへの態度を決定するところで、教会はこんぐらかってしまった。教会は本来、あらゆる手段を尽くして、産むことを奨励すべきであった。斜視の寡婦の赤子は「不身持の所産」とされていますが、ローザノフによれば、この場合、「生めよ、殖えよ」という誠命の遂行がとりわけ困難であったことにより、本来この赤子は通常の三倍も「法に適った」存在なのです。

このような神話学ないし形而上学を擁するローザノフの世界観が、果してキリスト教の枠内に納まりうるものか、危惧せざるをえません。なぜなら、キリスト教によれば、人間の原罪を贖うものはキリストの十字架上の死ですが、ローザノフにあって、原罪を贖うために人類はキリストを必要としない。ひたすら「産み、殖える」ことによって、既に人類は救われているというのです。

因みに、ローザノフに原罪意識はありません。これは彼にとってこの上なく縁遠い理念です。たとえ原罪といったものがあつたとしても、これはキリストにより贖われたことで既に消滅している。ところが人類は、その後も原罪が存続していると考えることで誤ったのだ、とも言っています。(『教会の壁の傍らで』1906第一巻所収『光と喜びとしての宗教』)のちに、ローザノフには「個」の問題が抜け落ちていて、彼の「種の形而上学」にとりわけ反撥したのが、若い世代に属するベルジャーエフでした。

7

ローザノフは、結婚に対する教会の態度を二点において咎めます。第一に、教会が結婚とその根底たる性行為を罪深いものとみていること、これは誤りであり、第二に、この罪深い行為が教会挙式により浄化され聖化されると主張すること、これは嘘であるということです。

結婚は教会の機密であり(婚配機密)、この機密は教会挙式によって表される。そして挙式は肉の交わりを浄化し祝福するのであり、これにより「婚姻は貴く、寢床は汚れなき」ものとなるのだと言う。本当にそうだろうか。これは信者たちを怖じ気づかせまいとする、外交辞令にすぎないのではないか。その証拠に、嬰兒誕生後、産婦に向かってなされる浄めの祈りは、挙式前の不身持においても、挙式後の結婚においても、同じ文句で読まれる。「主よ、今日子を産めるこの女を赦し給え。われら皆汝の前に穢れたるものなればなり」。挙式は何ひとつ浄化しなかった。結婚は、教会によって祝福されようがされまいが、「罪深い肉の交わり」であることに変わりはないのです。

さらに、こういう論議があります。「教会は結婚を決して否定しない。結婚と独身は等価であって、どちらが高いということは言えない」と大主教ニコノールは、トルストイの『クロイツェル・ソナタ』を批判して言いました。つまり「教会は独身も結婚もどちらも祝福する」というわけですが、ローザノフによればこういうことはありえない。

われわれの眼前に小さな白い正方形があるとす。その面積は限られており、拡大できない。この tabula rasa が独身です。この tabula rasa に何かを書けば、つまりその「白紙状態」を破壊する何かを書けば、それはこの「無垢」の価値と意義を損なうことになる。「これもあれも、どちらも結構だ、是認される」というのは、この場合、場所の単一たることによって論理的迷誤となる。つまり、正方形はひとつしかないのですから、そこに結婚を置くことは独身を斥けることになり、独身を置くことは結婚を斥けることになり。「わたしは林檎も葡萄も好きなように、結婚も独身も好きだ」とは言えない。なぜなら、独身とは coitus ではなく、coitus とは virginitas ではなく、両方が同時にはありえないからです。結婚とは必ずや、昨日の独身を不完全なもの・無用なものとして斥けることであり、独身とは必ずや、明日の嫁入り(ないし婿入り)を不完全・墮落・罪として斥けることです。(『曖昧模糊の世界で』 p.251 『論争資料』への註)

8

ローザノフによれば、教会の結婚に対する態度はこう要約されます、「われわれは本心では結婚を斥ける。しかし諸君はわれわれより弱く、結婚なしではやってゆけないがゆえに、われわれは結婚が全く醜悪なものとならぬよう諸君の結婚を按配し、結婚を許し、さらには、われわれが結婚を斥けるものではないと言明しよう」。ここには首尾一貫性・誠実さが無い。新婚夫婦への教会の祝福は口先だけのもので、心からのものではない。教会の本質的構造に変化が起こらないかぎり、結婚は教会にあって名目的なものにとどまり、事実上は存在せず、また存在しえない。

ローザノフの咎める教会の不誠実さとは、詮ずるところ、結婚が教会の機密とされてい

ることに帰着します。機密は始めから終わりまで神聖であって、不浄なものの混入を許さない筈です。いっぽう結婚とは、性行為なくしては完全に蒸発してしまうたぐいのもので、結婚が機密ならば、性行為も必ずや機密の内に含まれ、神聖なものとなる筈です。ところがこの性行為を、教会は相変わらず不浄な罪深い行為と見做している。これは「実際には不浄で呪われてさえいるものを、教会は清浄で神聖なものに見做すべく命じている」ということです。罪を許容する教会は、その瞬間罪と一体化し、罪ある教会となるのではないか。これは簡単明瞭な論理だ、とローザノフは言います。

教会と結婚はカテゴリーを異にしており、教会という有機的組織が機密としての結婚を容れえないというのは、ローザノフの最も根源的な直観です。彼はこれをさまざまな比喻で語っています。例えば、教会における結婚とは、今は快癒した肺の中の、被膜に覆われた結核菌のようなものだということです。それは肺（教会）にとって死をもたらすものですが、今は被膜に覆われている。ひとたび被膜が破れば肺は死ぬ。肺が生きたためには菌を生かしてはならない。これが教会と結婚の関係です。

結婚の機密がキリスト教の内に含まれないとなれば、この不自然な結びつきは、当然切り離さねばならない。これはキリスト教のためでもあるし、結婚のためでもある。切り離せば、キリスト教は血や肉や家族等によって汚されることはないし、結婚は忌まわしいものという目でみられることもなくなり、自らの讃歌を自らの内から汲むことになるでしょう。

教会はその理想において二重化している。そこには黒僧の理想（童貞、独身、修道）と白僧の理想（結婚、家族）が融け合わぬままハンダ付けになっている。教会がこの二重化を免れる道は唯一つ、結婚を機密とすることをやめる以外にはない。機密を六つにとどめ、第七の機密を放棄すること。

「魂の死は淫蕩から始まる。ところが全キリスト教世界は、童貞の誤った理想により、力と有機体の成長を淫蕩と解したことで失敗した。この成長は14歳から17歳という一定の年齢で起こり、身体的成長は内的探究へ、内的流れ（精子、卵子）へと変貌する。注意と配慮がこれほど必要などころはない。しかるに千年間、この配慮はなかった。〈成長するな！我慢して成長するな、ここにこそ称讃があり、栄光がある！〉成長への羞恥、栄光への渴望が出現した。かくして、怖れと魅惑の両面から励まされて、欺瞞が生の内へ入り込んだ。欺瞞と虚偽の性生活、実現なき空想、隠蔽された悪徳が生じた。遵守された童貞の理想、秘密裡ではすべてが許されている表面上の一夫一婦制が、キリスト教的人類を墮落させた。なぜなら、わたしの魂に触れるものは、わたしがどう見えるかではなく、わたしが現に何であるかであるから。キリスト教徒の魂は、自らについて、自らが実際に何であるかを知っていることによって、墮落したのである」（『曖昧模糊の世界で』p.187『論争資料』への註）

9

性と結婚を擁護するローザノフの論旨に対しては、一連の論者たちが反論しました。『曖昧模糊の世界で』（初版1901）という著書はこの論争を収めたもので、ここにはローザノフ自身の論文のほかに、論敵たちの反論も『論争資料』として収録されており、これにさら

にローザノフが註をつけて反論するという構成になっています。この註のほうが本文より長いことしばしばで、彼の本を読むには、この註を読まなくては行けないのです。『曖昧模糊の世界で』ばかりではありません。彼の著書のかなりの部分が同じ構成をとっています。彼はまた、親しかった著作家たち（ストラーホフ、レオンチエフ）の自分宛て書簡を出版していますが、これにも彼自身による詳しい註が付されており、その結果これら書簡集は、まぎれもなくローザノフの著書となっている。序文作家という言葉がありますが、ローザノフには定めし註釈作家という呼名が相応しい。

参考までに、ローザノフの論敵たちの内から、評論家にして雑誌編集者でもあった C. Ф. シャラーポフの所論を引いておきます。

「童貞が夫婦生活より高く、くこれを受け容れうる者」にのみ至高の功業として与えられることは、福音書で全く明確に示されている。キリスト教の理想は疑いもなく童貞にある。新約が約束するものは魂の結びつきであり、その際不可避な肉の結びつきのことは、人間の弱さとして、ただし全く明確な罪として、大目に見ているにすぎない。産婦になぜ浄めの祈りが誦えられるかという、と、嬰兒がたとえ天使であっても、やはり罪から生まれたものだからだ。もっとも、この罪を痛悔はしない。なぜならこの罪は、くこれを受け容れえない者たち」の弱さとして、予想されているからだ。

「しかし、夫と妻が兄妹として生きることに進んで同意するなら、これはユダヤ人にとっては不法行為だろうが、われわれキリスト教徒にとっては精神的高揚のなせる業であり、教会がこれに異を唱える理由はない。教会の法と衛生学に厳しく則るなら、罪のための場所は多くない。殆ど受胎に必要なだけしか残らないだろう。こう考えれば、結婚の機密とはほかでもない、節制 воздержание の機密なのだと言える。

「ローザノフにとって性行為は一種の讃歌、殆ど神への奉仕だが、自己を完全に制御している理想的キリスト教徒にとっては、子供を持ちたいという正当で聖なる希求への、悲しむべき讓歩なのだ。子供を贖うにはこれほどの価を払わねばならず、動物的なものまで降りて行かねばならない。肉体的結合は、魂を捉える精神的愛の内なる些細な一点にすぎず、時として愛の終わり、愛の死である。この点動物世界とは全く逆なのだ」（『曖昧模糊の世界で』 p.127 『結婚とキリスト教』への註。大意）

ここには性行為に関するトルストイ的理念・ソロヴィヨフ的理念の反映が明らかに見て取れますが、ローザノフがとりわけ強調するのは次の点です。つまり、結婚が「許されたもの」である限り、それは未だ「機密」としての結婚ではない。「許された淫蕩」にすぎない。結婚は神の意志である。この「神の意志」の遂行を「大目に見る」とはどういうことか。これは「神の意志の遂行」が「罪」であるということではないか。何時、何処で、誰によって、神の法がすり替えられたのか。これこそローザノフの探究が目指す根本的問いでした。

10

ローザノフは究極のところ、キリスト教の本質は禁欲主義であると考えています。キリスト教は独身至上主義・修道制度という悪しき禁欲主義へ踏み込んだ。

ローザノフは、禁欲主義一般を否定するものではありません。禁欲主義はいつの時代に

も存在したし、これはキリスト教の専売ではなく、おそらく宗教の専売ですらない。禁欲主義とは、人間が自らに課する「肉の沈黙」であって、修道院で行われている「沈黙の誓い」と同じものです。外的言語が沈黙すれば、内的言語は深まりを増す。空疎なお喋りが熄めば、心の言葉は一層研ぎ澄まされる。偉大な賢者たち、言葉の大芸術家たちも、それが必要なときは沈黙に身を委ねます。「沈黙の誓い」とは、言葉のそれであろうと肉のそれであろうと、大なる集中、自己自身の内面への沈潜なのであって、賢明な沈黙が無口を意味せず、言葉の否定や軽視ではないように、「肉の沈黙」は肉の滅却ではなく、肉への敵視ですらない。肉の禁欲は禁欲者に、肉の有する高次の意味合いを開示する。民数記第六章にある「ナザレ人の誓願」とは、こうしたものです。肉と性を純潔に保つために、或る種の禁欲主義は不可欠です。それに対しキリスト教の禁欲主義とは、「肉と性を滅却して神の国へ入ろう」という一種の去勢派的憧憬であって、これをローザノフは悪しき禁欲主義と呼ぶのです。

山上の垂訓には童貞 ДЕВСТВО についての言及さえない。キリストは「幸福なるかな童貞者たち。天国は彼らのものなり」とは言わなかった。パウロも「処女 ДЕВСТВО のことに就きては主の命を受けず」(コリント前書7.25)と語っています。しかるにこの童貞が、のちに「救いへの王道」となって全キリスト教を覆い、こんにちでは、童貞の程度によって教会が分かれるまでに至っている(カトリック教会では全聖職者が禁妻帯、正教会では高位聖職者のみ禁妻帯、プロテスタント教会は妻帯かどうかを問わない)。童貞者たちは福音書の瑣末な言辭、ちょっとした言及にしがみつぎ、これを童貞の理想へと仕立て上げた。この理想を誰が、どの程度「受け容れうるか」という判別に熱中し、この「受け容れ」の詩と哲学に没頭してきた。

この転換はいつ、何時、何処で起こったのか。ローザノフとしても、この転換は歴史の宿命的な成り行きであったとしか言えない。「星は水の源泉に落ち、水は苦くなりぬ」(黙示録8.10)。二千年前、性の甘味は性の苦味へ、苦艾へと変わった。「人独りなるは善らず。我彼に適う助者を彼のために造らん」(創世記2.18)という神の意図は、二千年前に破壊された。この「苦艾」への使徒パウロの態度は曖昧でした。彼はこの苦い水を飲めと言ったのか、飲むなと言ったのか。そもそも、結婚に対するイエスの態度全体が、既に矛盾したものでした。パウロも、のちには教会も、この矛盾を継承したにすぎない。

先ず、ガリラヤのカナの婚礼がある。さらに、旧約の確認とも言うべきマタイ伝十九章。もっとも、この言葉は、思いがけぬ去勢主義によって締め括られる。次いで、キリストの弟子たることに、家族の一員たることを対置する一連の言葉。「人の仇はその家の者なるべし。我よりも父または母を愛する者は、我に相応しからず」(マタイ伝10.36)。「人もし我に來りて、その父母、妻子、兄弟、姉妹、己が生命までも憎まずば、我が弟子となるを得ず」(ルカ伝14.26)等々。ここでどちらかを選ばねばならぬことは、パウロにとっても教会にとっても、疑問の余地がなかった。「生よ、繁殖よ」か、それとも「汝らもし生み繁殖なば、わが弟子たりえず」か。(未完)

L'amour sexuel dans la pensée russe (V)

V. Rozanov (2)

AOYAMA Taro

Le problème de mariage conduit Rozanov au problème religieux. Dans son livre "Le Problème familial en Russie" (2 tomes, 1903), Rozanov prend la parole comme réformiste de quelques règlements religieux concernant le mariage, mais l'autre livre "Dans le monde vague et indécis" (1901) le révèle déjà comme critique tranchant non seulement de l'Eglise, mais aussi du christianisme.

Quand il a écrit l'article "La Famille en tant que religion" (1898), Rozanov pensait que le christianisme était compatible avec le sexe. C'est une religion qui voit la divinité dans la matrice. Jésus Christ a sanctifié le sexe, le mariage et la famille, en s'incarnant sur la terre à travers la matrice de sa mère.

Cette interprétation du christianisme est, selon Rozanov, l'unique voie qui peuve le sauver, car dans la cas contraire, est inévitable la séparation entre l'Ancient et le Nouveau Testaments. La phrase bien connue de l'Evangile selon Matthieu, "il est mieux de ne pas se marier", est un ajout insignifiant, peut-être apocryphe, car son idée est incompatible avec l'Ancient Tectament ("Soyez féconds, multipliez, remplissez la terre").

Vers l'époque de "La Face sombre" (1911), Rozanov ne croit plus à la compatibilité des deux Testaments. Autrefois, il trouvait le christianisme dévoyé à cause de l'hostilité envers la chair et le sexe, tandis que maintenant, il considère cette hostilité comme quintessance de cette religion. Ni l'Eglise, ni le christianisme ne peuvent contenir le sexe. Le sexe est absent dans le Christ lui-même. L'ascétisme et le monachisme sont les aspects essentiels du christianisme.

Pourtant, Rozanov ne quitte pas définitivement la religion du Christ. Nous trouvons toujours chez lui une mélange de sympathie et d'antipathie pour le christianisme.